

計画が生まれ、その中で国保会計への法定外の繰り入れはできないということになり国民健康保険の健全運営が厳しく求められたそうです。

呉市の一人当たりの医療費は全国、県と比較しても高額となっており、その原因は海軍が常駐していた地域で病院が多くあり市民は検診等でも気軽に病院を受診することができたことにあるということでした。重複診断や高額な医薬品が医療費を圧迫している等原因をデータ化し健康管理増進システムの構築によってジェネリック使用促進奨励通知の発行やレセプト点検を行ったそうです。データをもとに頻回受診者や重複受診者を訪問して適正な受診を勧めることによって医療費の抑制に効果が出たそうです。一つの成果としてジェネリック使用促進通知の取り組みにおいては5年間で3億7千万円の削減ができたそうです。ただこの事業は市が企業に委託して行っており、事務的な作業については職員が行っている

ものではありませんでした。視察を終えて、本町も平成23年度国民健康保険が赤字決算となり、24年度の歳入より繰り上充用（赤字補てん）を行っているの、見直してきるところを調査し、いつまでも健康で地域で暮らしていけるよう、できる対策は取り入れていかなければと感じました。



呉市役所内の会議室にて

教育厚生

高齡化社会で生き生き暮らせるまちづくり



教育厚生常任委員長
西村 将伸

●周防大島町

人口の減少や高齡化が進む黒潮町の課題解決のため、作家・星野哲郎さんの出身地として知られる周防大島町を訪ねました。同町は山口県の東南部に位置し、瀬戸内海では3番目に大きな島であり、豊かな自然と温暖な気候に恵まれた特産品はミカンの島です。

昭和51年7月大島橋が開通し本土と結ばれていますが、近年は全国に先駆けて高齡化が進み、若い担い手が減少し、高齡化率が全国一位の町として知られています。

こうした状況から、周防大島町では将来の高齡化社会を見据えて、多くの住民が参加し、若者から高齡者までが共に安心して暮らせる『元気』の島づくりを構想を策定しています。

『元気』は、例えばミカン畑で高齡者が働きやすい環境を整備するとか、新たな担い手として都会の定年退職者がミカン作りに携わることができ、年をとっても元気に暮らせる環境づくりに取り組み、保健・医療や福祉では、教育や研修する場を拡充して、若い人の就業に結びつけたり、新たな交流の場としていく取り組みです。

『にっこに』は健康に不安が生じたときでも、安心して住める住環境を整えたり、グ

ループ活動や食事のできる住民のふれあいの場をつくって、明るい気持ちで暮らせる環境づくりに取り組むことです。『安心』は人はだれでも「若い」や「病」を避けることはできないが、そのような場合でも緊急通報や介護サービスを整備して、不安を感じないで暮らせるようにしていくことでした。

こうした構想策定を基に、住民一人ひとりがまちづくりの主役となつて、高齡者の見守りや地域の支え合いの活動など、できることからちよつとずつ島づくりを推進していきます。

本町にとつても農業や漁業など、高齡者の多くが現役で生き生き暮らせる住環境づくりに大変役立つ視察研修でした。



周防大島町役場（本庁舎）